信は說文曰、誠也、从人从言、會意、徐曰、於文、人言爲信、言而不信、非爲人也、信の字、人偏に言の字をかくは、六書においては會意に屬す、偏旁の意を以て作りし字なり、いふ意は、人の言に誠あらざるは人にあらず、故に人の言は必信あるべしと云ふ意なり、五常においては、心にまことあるを云ふ、口にいつはりをいはざるも、其の內にあり、仁義禮智のいつはりなき眞實なるを信と云ふ、信なければ仁義禮智にあらず、仁義禮智四德の外に、又信あるにあらず、親によくつかふるは孝なれど、名聞のためにつとめ、又親の寵愛をねがひてつとむるは孝にあらず、君によくつかふるは忠なれど、君の寵をねがひ、官祿をむさぼりて、奉公をつとむるは忠にあらず、是皆まことの道にあらず、忠孝にかぎらず、萬事皆かくのごとし、中庸に不誠無物といへり、物なしとは僞りて實なきなり、おやにつかへ、君につかふるに、まことなくして、右にいへる如くなれば、忠孝にあらず、是物なきなり、萬の事皆まことなければ物なし、凡名と利とを求めてすることは、たとひ天下にきこゆるほどの善なりとも、其の心眞實ならざれば私とす、善にあらず、是物なきなり、四德にまことなければ、仁義禮智にあらず、いつはりなり、是物なきなり、人の天より生れつきたる性は、只仁義禮智の四德なり、此の四德にて人道行はる、此の故に孟子はたゞ仁義禮智をときて、信を說き給はず、程子曰、四端不言信者、既有誠心爲四端則信在其中矣、これを以て仁義禮智の外に信なきことをしるべし、

〔辨名上〕忠信

信者謂言必有徵也、世多以言無欺詐解之、苟以言必有徵爲心、則無欺詐不足道、如信近於義、言可復也、是其言雖有徵、必欲合先生之義、若言不合義、則雖欲踐其言、亦有不可得者、其究終至無徵也、朱子引約信曰、誓而訓信爲約、是不知其解已、又如民無信不立、謂民信其上也、愼其號令、不敢欺民、則民信之矣、然信之而畏不如信之而懷、故必能爲民父母、而後民信之至焉、它如人而無信不知其可也、及言